WOOD ANDERSON

SHERWOOD ANDERSON

20世紀英米文学案内 8

Sherwood Anderson

アンダソン

大橋吉之輔編

KENKYUSHA

20世紀英米文学案内　8

アンダソン

1968年8月30日　初版発行

定価　480円

編　者　大橋吉之輔

発行者　小酒井益蔵

印刷者　小酒井益三郎

発行所　研究社出版株式会社
東京都新宿区神楽坂1の2
電話 東京 (269) 4521-5 番
振替口座　東京 83761 番
郵便番号　162

印刷　研究社印刷
美術印刷　大平舎
製本　新栄社製本
製函　加藤製函所

(落丁・乱丁本はお取りかえします)

目　　次

人と生涯 / 大橋吉之輔　1

作　品

『ウィンディー・マクファーソンのむすこ』/ 橋口保夫　30

『行進する人々』/ 橋口保夫　37

『オハイオ州ワインズバーグ』/ 宮本陽吉　47

『貧乏白人』/ 須山静夫　66

『多くの結婚』/ 加藤弘和　83

『暗い笑い』/ 徳永暢三　94

『欲望のかなた』/ 須山静夫 107

短　編 / 山本　晶・水口志計夫 119

『卵の勝利』『馬と人間』『森に死す』

自伝的作品 / 原川恭一・小山田義文 146

『物語作者の物語』『ター――中西部の子供』

『シャーウッド・アンダソン回想録』

評　価 / 宮本陽吉 185

年表・書誌 / 大橋吉之輔・山本　晶 巻末 1

索　引 巻末 31

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

人と生涯

はじめに

シャーウッド・アンダソンは、自分のことを語るとき、ウソをついているのか、ほんとうのことをいっているのか、こちらにはさっぱり見当がつかなかった。……自分のことを話すときの彼は、まるでマンドリンをかきならして楽しんでいる男のようだった。だが、そのマンドリンの演奏は、聴いてくれる人のためにやっているのではなかった。彼は自分自身についてのさまざまな作り話を、自分の耳で聞くのが好きだったのだ。ひとりでいるときも、彼は自分のことを声をあげて語っていたかどうか、その点はぼくは知らないが、人前に出ると、彼はいつもそうしているふうだった。

と、シャーウッド・アンダソン（Sherwood Anderson, 1876-1941）の友人の一人ベン・ヘクト（Ben Hecht, 1894-1964）は回想している（『ボヘミアだより』一九六四）。

アンダソンという作家あるいは人物についての、ヘクトのこのような評言は、なにもけっして珍らしいものではない。アンダソンの生涯を少しでも調べようと思って、彼自身の書いた自伝的なものや、彼が人に語ったといわれている資料などにたちむかうと、たちまち、どこまでが正確な事実で、どこからが虚構なのか、大きな困惑にみまわれる。アンダソン自身も、そのいくつかの自伝的作品のなかで、くりかえし、そこに語られている内容をそのまま自分の正確な伝記ととられては困る、自分の内部には空想力や想像力の要素が非常に多く、真実と虚構とを区別することがわれながら困難なのだ、と語っている。

しかし、このようなことは、なにもアンダソンだけのことではない。たいていの作家、詩人などというものは、自らを語るときに、このアンダソンのような傾向を示すことが多い。作家や詩人自身によって語られた文章と、さまざまな傍証とによって、その作家ないし詩人の正確な伝記を樹立させようとする作業が、文学の研究ということの一部門として認められているくらいなのである。だが、考えてみると、私たちがアンダソンの伝記に興味をひかれるのは、まず、彼の作品の多くが自伝的な要素を濃厚にもっているために、彼の作品の愛読者として、作品中に語られている虚構の

世界と、事実とのあいだのギャップを埋めてみたいという推理的な興味ということがあるだろう。しかも、その推理的な興味は、アンダソン自身の生涯が比較的最近で、いろいろな傍証もまだ比較的集めやすい（もっとも、同時代の他の作家や詩人のそれに比べて、けっして容易だとはいえないが）ということで、ある意味ではいっそうその面白さをそそられているようでもある。また、アンダソンのような作家のばあいには、その伝記をめぐる真実と虚構とのあいだのギャップを解明していくことが、作家アンダソンへのアプローチのうえで、一つの大きなカギとなることも否めないのである。

たとえば、アンダソンの伝記学者として、『シャーウッド・アンダソンの形成期』（*Sherwood Anderson's Formative Years* (1876–1913)）という有名な論文（未刊）の著者であるインディアナ州ポール州立大学のウィリアム・A・サットン（William A. Sutton）教授は、同論文にさらに補筆改訂を加えて、『ワインズバーグへの道』（*The Road to Winesburg*）と改題、その一部はすでに発表されているが、一九六七年に『エルシノアへの脱出』（*Exit to Elsinore*, Ball State Monograph Number Seven, Muncie, Ind.: Ball State University, 1967）と題して公刊された小冊子では、シカゴへ出てくる以前、オハイオ州イリリア（Elyria）での、アンダソンの家庭生活や社会生活の模様が、当時のアンダソンを知っている現存者たちの証言や、当時の新聞記事などを基にして、詳細に語られ、イリリア出奔前後に、彼がかかった記憶喪失症（アムニージア）の状況も、病院や医師の証言などや、またその記憶喪失症中に彼が書いた手紙やノートなどによって、詳しく描きだされている。この小冊子は、アンダソン研究の最近の成果の一つとして、注目すべきものであることにまちがいはないが、意地悪い目でこの著作だけを見れば、アンダソンが記憶喪失症にかかったという事実に推理的興味をそそられて、アンダソンの文学とはなんら関係のないところで成立した小冊子ともいえないことはない。もちろん、これはサットン教授のアンダソン研究についての真剣な学究的態度を批判しているのではけっしてないが、そのような事実をふまえて、他のいろいろな視点からアンダソンの伝記を書こうという試みが、現在でもなおあちらこちらで行なわれているのである。

一方、アンダソンの伝記を少しでも知ると、その伝記自体が、彼が発表した多くの自伝的な小説そのものよりも面白そうだということがある。よく、アンダソンという作家ほど、その作品はあまり読まれないのにその生涯ばかりが論じられる人も珍らしい、といわれるが、事実、一九世紀後半の、あの農本主義から機械工業中心の資本主義への移行という激動の時代に、その激動の中心であった中西部の一郭で、生まれ、育ち、激動の波にのって実業家としてひとかどの成功をおさめながら、その成功を棄てて作家生活へという劇的な転身をみせた彼の経歴は、アメリカ現代史の揺籃期を身をもって生きてきた一人のアメリカ人の証言として、大きな意味をもっていることもたしかなのである。

ただ、そのような証言は、なにもアンダソン一人にかぎらず、ほかにも数多くあったにちがいない。そのなかで、アンダソンの証言をひときわ目だつユニークな存在にしているのは、もちろんその証言が彼の文学作品と不可分にむすびついているからであるが、ここで重要なのは、そのむすびつきのうちに、一人の現代人の、変動する社会と自己との関係を見さだめようとする苦悩が見出されるということである。その自己とは、もちろん、変動していく現代社会のなかで次第に疎外され失われていく虐げられた自己への意識で、そのような自覚もまた、現代文学のなかで、なにもアンダソン一人のものでないことはいうまでもない。しかし文学史的にみると、アンダソンのそのような自覚は、二〇世紀アメリカ小説のなかで、いわば先覚者的な位置にあり、しかもそれを作品に反映するばあいに、当時ようやく文学や芸術にも大きな影響を見せはじめていたフロイト流の心理分析的な手法などを、いちはやく用いた。こういった彼の心理主義的な方法や、彼の天賦の才とも思える物語作者（ストーリー・テラー）的な才能や、当時のシカゴやニューヨークを中心とする文壇の状勢などが、いちやく彼を当時の文壇の大御所（ボス）的な位置におしあげ、たとえ一時的ではあったにせよ、若い世代であったヘミングウェイ (Ernest Hemingway) やフォークナー (William Faulkner) や、さらにはトマス・ウルフ (Thomas Wolfe) などにまで、大きな影響をあたえたことは周知のとおりである。その影響は、必

ずしも純粋に文学的なものばかりではなかったが、それだけに、ヘミングウェイやフォークナーたちの文壇への登場には、アンダソンの存在が非常に大きかったともいえるだろう。

ところで、すでにくりかえし述べたように、アンダソンの作品には自伝的な要素が濃厚に反映しているものが多いが、それらはけっして正確な自伝ではなく、伝記的事実に関しては、いたるところに矛盾や奇怪な発言が見出される。事実に関してはまったく自信がない、とアンダソン自身も告白しているくらいである。もちろん、それは、たんなる事実よりももっと重要なものがあるにちがいない、という彼の信念の表明でもあるが、それに関連して、アンダソンの伝記、ことに彼が文壇に登場するまでの経過については、彼の作品が世の注目をあびはじめたころから長いあいだ、いまでは「神話(ミス)」とも呼ばれているものが行なわれていた。その「神話」は、彼の作品中の自伝的な要素を土台にして組み立てられたものであるが、それによると、アメリカのルンペン階級である貧乏白人(プア・ホワイト)の一家に生まれた彼は、幼少より立身出世をこころざし、辛苦のすえ、ついには地方の一実業家として成功の城を築くにいたったが、ある日とつぜん回心を経験し、成功も妻子もすべてのものを棄ててシカゴに出奔、以後ふたたび転々と放浪生活をつづけながら文筆活動をはじめ、四〇歳前後にしてやっと文壇に登場することとなった、というのである。この話の大筋は、事実とさしてへだたりはないが、アンダソンが作家としての自分を見出すまでにたどったこのような道は、いわゆる「ホレイショー・アルジャー神話」(Horatio Alger Myth)ないしは「アメリカの成功の夢」(American Dream of Success)といわれるものの成就とその挫折の、まさに典型的なパターンを示しているのである。そして、そのパターンを主題にして、アンダソンはくりかえし作品を書いた。彼の小説の主人公の多くは、貧困→成功→成功→放棄→放浪、という図式のすべて、あるいはその一部を、くりかえし踏襲しているのである。

しかし、ここで思い出されるのは、アンダソンと同時代の作家で、アンダソンと親しかったドライサー(Theodore Dreiser)のことである。ドライサーの諸作品も、主題からみれば、同様の主題をくりかえして

いるといえよう。ただし、アンダソンがドライサーの作品に刺激をうけて、初期の長編『ウィンディー・マクファーソンのむすこ』(*Windy McPherson's Son*, 1916)や『行進する人々』(*Marching Men*, 1917)を書いたという説が、多くの学者や批評家のあいだで行なわれていたが、この点は、アンダソンの『回想録』(*Sherwood Anderson's Memoirs*, 1942)のほうを信頼すべきであろう。彼はそのなかで、自分がドライサーの名前をはじめて聞いたのはイリリア時代のことであったが、その当時はドライサーの作品はなにひとつ読んではいなかった、と述べている。また、ドライサーの『資本家』(*The Financier*)が一九一二年に公表されたときには、前記二作の原稿はすでに(一九一〇—一一)書きあげられていたのである。

それはともかくとして、同じような主題をあつかいながら、アンダソンとドライサーの作品には、作品自体の密度からいっても、主題の追及の方法や技巧からいっても、大変な相違が見出される。もちろんこれは、両人の人物ないし資質の差、また両人の文学観の相違などが、その原因であることは自明であるが、ドライサーもアンダソンのそれとあまりちがいのない環境に生まれ育ち、成長してきたはずであるのに、アンダソンが主題を自伝的なものにあまりにも頼りすぎたのにたいし、ドライサーは、小説においてはすくなくとも、自伝的なものにつとめて背を向けようとしていたことは、やはり注目しなければならないだろう。(そして、ドライサーはアンダソンのよりもずっと正確な自伝をいくつも公刊しているのだ。)表面的には、ドライサーの自然主義にたいして、アンダソンの心理主義的リアリズムということがいえるかも知れないが、ドライサーの自然主義的信条の堅固さに比べて、アンダソンのはいかにも八方破れの観がないこともなく、首尾の一貫した客観的な論理性や、ものごとを徹底的に考えぬいてみようという緻密さには欠け、その場その場の主観的感情や感傷をむきだしにしてはばからず、そういった感情や感傷のつながりに矛盾が生じてきても、それはそのままで放りだしてしまうといったような傾向を多分にもっていたように思われる。

アンダソンは、自分がシカゴに出てきて作家の列に加わったとき、自分は「モダンな」作家としてデビュ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

ーし、現代アメリカ文学の旗手の一人になったのだということを、くりかえし述べている。客観的にみて、彼が『オハイオ州ワインズバーグ』(*Winesburg, Ohio*)などの作者として、「モダンな」作家であることは疑いないが、彼が自己を「モダンな」作家というときには、現代小説がたどってきた「自伝的」あるいは「心理主義的」な傾向をふまえて、自分をドライサーなどと比べているふしがないこともない。また、ヘミングウェイやフォークナーたちが、なんらかの形で自分の影響をうけて巣立っていった、という自負もそこにはあっただろう。だが、そういう自負というか、そういったものはアンダソンのばあいには一つの弱みにすぎなかった。なぜなら、ヘミングウェイやフォークナーがアンダソンからうけた影響といえば、その一つは文学の埒外にある社会的権勢の庇護であり、文学の領域では、アンダソンの技法ないしは心理主義的リアリズムを一つの下敷きとして出発しながら、一刻もはやくアンダソン的なものを克服していこうという、自戒的な教訓にすぎなかったからである。逆説的にいえば、アンダソンはヘミングウェイやフォークナーたちに真似られるだけの弱みをもっていた、ともいえるだろう。ドライサーには、そんな弱みはなかった。

このような弱みが、どこから出てきているかということは、たいへん興味ぶかいことである。それを考える一つの手がかりとして、彼の著作のなかで非常に多く用いられている想像力(imagination)と空想(fancy)ということがある。彼はこの二つの語が非常に好きであったらしいが、注目すべきことに、彼はどうやらこの二語の意味をほとんど同義に考え、混同していたらしいのである。というより、想像力の意味を真剣に考えないで、ふつう常識的に空想といわれるものと、ほとんど同義に考え、極言すれば、空想こそが文学を支えている根本だと思っていたのではないかとさえ推測されるのである。文学の主題を追及して、それに形をあたえる原動力となるものが想像力であるとすれば、アンダソンにはそれが致命的に欠除していたのではないか。そのかわりに、彼は豊富で感受性の強い空想力をもっていた。空想がことばを媒体とするとき、そこには主題を強力に創造したり追及したりしていく力はないが、そのかわり、美しくも醜くも、印象的な、あ

るいは具象的な、「絵」を描きだしてみせる力はある。そして、その際、描きだされた「絵」は、空想が巣食っている自我から離反して、独立した存在にもなりうる。その独立した個々の「絵」を強い糸でつなぎ合わせていくものが、また想像力であるとすれば、想像力の稀薄さということは、小説家としては致命的な欠陥ともいえるだろう。ここでまたドライサーとアンダソンとの比較をもちだせば、ドライサーには空想よりも想像力が、アンダソンには想像力よりも空想が、それぞれ豊富に存在していたともいえるだろう。ドライサーは、こわい強い小説家であり、アンダソンは、弱い愛すべき物語作者であった。

しかし、空想は「絵」を描きだすといっても、それは長編小説にたいする短編小説への比喩をいっているのではない。短編小説を創造する原動力の一つに想像力があることは否定できない事実である。ただ、短編小説のあるジャンルでは、想像力よりもむしろ空想のほうが効果的であることもたしかである。また、短編小説においては、多くのばあい、想像力と空想とのみごとな結合が、長編小説のばあいよりも、美しい果実を成就させることが多い。そういった点では、アンダソンのほうがドライサーよりも成功している。短編という限られた形式のなかでは、アンダソンのほうが、感傷家であるがゆえに夢中になれる度合いも強く、それだけに没我的になることもできた。

文壇に名声をはせてからのアンダソンは、そういった自分の弱点に気づき、それとの葛藤に心を痛めた形跡も見うけられる。だが彼は自分のことを、作家、物語作者（writer, teller of tales, story-teller）などとは口ぐせのようにいったが、めったに小説家（novelist）だとはいわなかった。現代作家としての彼の新しさも弱さも、そういった点に象徴的に集約されているように思われる。

生い立ち——「はりきりボーイ」

シャーウッド・アンダソンは、一八七六年九月一三日に、オハイオ州南東部のインディアナ州との州境に近い小さな町キャムデン（Camden）で生まれた。このことについては、奇妙なことに、なにひとつ町の役場

にもどこにも公式の記録は残っていないが、さまざまな傍証から、誕生地、誕生日ともに疑いないと思われる。父のアーウィン・アンダソン (Irwin Anderson) は、オハイオ州からの軍隊にくわわって南北戦争にも参加したことのある人で、有能な馬具製造業者であり、母のエマ・スミス・アンダソン (Emma Smith Anderson) は、不幸な境涯に生い育った人であったが、二〇歳のとき、アーウィンと結婚した。この父と母は、アンダソンの多くの作品のなかで、さまざまな重要な役割りを演じているが、アンダソン自身が二人の正確な経歴をどれだけ知っていたかは、きわめてあいまいである。

たとえば、父のアーウィンは、アンダソンが描写しているような南部出身の伊達男ではなく、ペンシルヴェニア州からオハイオ州に開拓者としてきた農園主の子孫であり、南部には南北戦争後しばらく滞在したことはあったが、それ以後はオハイオ州内に定住して馬具商を営んでいた。彼はみんなの人気者で、田舎のバンドの一員として活躍したり、日曜学校で子供を教えたりしていたが、とりわけ、話上手としてきこえていた。シャーウッドはその第三子で、兄のカール (Karl) と姉のステラ (Stella) が上にいた。

その家庭は、けっして富裕ではなかったが、貧乏白人(プア・ホワイト)といわれるほどの一家でもなく、その当時を知る人の言によれば、清貧 ("aristocratically poor") とでもいうのがふさわしく、人から軽蔑されたり非難されたりするような家ではなかった。しかし、シャーウッドが生まれたころから、家運は急速にかたむきはじめた。機械時代の到来とともに、馬具なども機械でつくられるようになり、アーウィンの仕事が目にみえて減ってきたのだった。それとともに、アーウィンはいよいよ飲酒と饒舌に耽溺するようになっていった。同時に、仕事のありそうな場所をもとめて、一家の居所はオハイオ州内を転々と変わりはじめたが、時代の推移に抗しきれずに虐げられていく人間の宿命は、シャーウッドの心に、無意識のうちにも消すことのできない傷あとを残していった。

一八八四年、一家はオハイオ州中北部の小さな町クライド (Clyde) にたどりつき、それから一八九六年までの一二、三年、そこに定着した。父のアーウィンは

自分の馬具店をもつことができないために、よその馬具店にいって働いたり、のちには小さな工場に雇われたり、ペンキ屋になったりした。一方、あいもかわらぬ飲酒と饒舌癖はますますひどくなって、家族を顧みることもあまりしなくなり、一家の支柱としての重荷は、母のエマにもっぱらかかるようになっていた。そのころには、シャーウッドの下に、アール(Earl)、レイ(Ray)、アーヴィング(Irving)という三人の弟も生まれており、家計の苦しさは並大抵ではなかった。シャーウッドの姉のステラは学校で教えて家計を助け、他の男の子供たちも早くから新聞売子になったり、ペンキ屋をやっていた父の手づだいをしたりして、家を助けた。だが、この一家が貧窮のどん底にあったと考えるのは早計で、一九世紀のアメリカでは、子供が働いて家を助けるということは、そんなに珍らしいことではなかった。もっとも、そのために、シャーウッドをはじめとして兄弟たちの学校教育は不規則になりがちで、あとで述べるように、シャーウッドがハイ・スクールの卒業証書をやっと手にしたのは、彼が二三歳のとき、一九〇〇年のことだった。

シャーウッドは、その少年時代から青年時代までの大事な時期を、このクライドの町ですごしたわけだが、のちに彼のワインズバーグのモデルになったといわれるこの町での十数年の生活は、彼に非常に大きな影響をあたえた。その一つは、このオハイオ州の田舎町にまでおしよせてきていた新しい時代の息吹きで、自分の一家の生活が苦しくなっていく理由がしだいにわかりはじめるとともに、自分も時流にのってなんとか機会をつかみ、一旗あげてやろうという野心に燃えはじめた。彼は金になることならどんなことにでもとびついてアルバイトをやり、しかもそのやりかたが機敏で抜け目がなかったので、町の人々から「なんでも屋のはりきりボーイ・アンダソン」("Jobby" Anderson)と呼ばれたほどだった。

同時に、このクライドの町には、時流も押し流すことのできない中西部の田園の牧歌的な雰囲気と、そこに住む人々の人間味あふれる喜怒哀楽の親しい息づかいがあった。日々の生活のなかから、シャーウッドは知らず知らずのうちにそれらのものを吸収し、中西部の小さな田舎町の住民の哀歓を身もって経験した。そ

れらは、シャーウッドにとって、終生忘れることのできないものだった。

一方、彼は子供らしいヒロイズムとロマンスと冒険にあこがれる多感な少年でもあった。学校教育は不規則になりがちだったとはいえ、クーパー（James Fenimore Cooper）などのロマンスや、リンカン、ナポレオンなどの伝記に心をおどらせ、冒険あそびに夢中になることもしばしばだった。ハイ・スクールを中退して自転車工場に勤めたり、一八九五年三月には州軍に加わったりしたが、彼の野心と冒険好きとは衰えることはなかった。

成功への夢

同じ一八九五年、一家の支柱であった母のエマが過労のため肺結核にかかって死去すると、父のアーウィンにはとても家を維持できるだけの甲斐性がなかったので、一家は離散しなければならなくなった。シャーウッドにとって、母は終始、謎の存在であったが、寡黙、内に秘めた熱情、忍耐、自己犠牲、克己心など、父には見出しえない美徳の持ち主として、彼は母を非常に尊敬していたので、その死はとくに痛ましく感じられた。後年、彼はこの母を素材にして、さまざまな物語を書いている。

母が死んでまもなく、兄のカールは画家を志してシカゴに出たが、シャーウッドも、一年ほど馬丁として働いたあと、兄のあとを追ってシカゴに出た。それは一八九六年の秋のことで、新時代の息吹きにわきかえるシカゴは、立身出世の野心に燃える彼にとっては、自分の願望を成就できるかも知れない魅力を秘めた都であったにちがいない。彼はそこでリンゴ倉庫の運搬夫として働きながら、夜は巷を歩きまわり、希望と幻滅の交錯にとまどいを感じながら、立身出世の糸口をつかもうと機会をうかがっていた。

だが、一八九八年、キューバをめぐっての米西戦争がはじまる気配が濃くなってくると、彼は故郷に手紙を書いて、出征したいという熱意を示した。後年、彼はこの熱意を否定し、リンゴ倉庫で働くよりは軍隊のほうがまだましだと思ったにすぎない、と述べているが、当時の彼がほんとうにそう考えていたかどうかは

疑わしい。シカゴでの労働者としての生活から脱けだして、なにか刺激的な変化と冒険をもとめて、軍隊生活に熱意を示した、というのが当たっているだろう。ともかく彼はクライドにかえって軍隊にはいり、町の人々の歓呼に送られて出征、約七カ月半にわたる軍事訓練をジョージア州とテネシー州の基地で受けた。しかし訓練がすんだころには、すでにスペイン側が降服して戦争は終わってしまい、彼は実戦には参加することなく、ただ占領軍の一員としてキューバにわたり、そこで四カ月たらずすごしたにすぎなかった。だが、この短かい軍隊生活は、もちろん彼に影響をあたえずにはおかなかった。彼は、軍隊という一個の統一体のなかでの集団生活に、ある神秘的な魅力を感じ、ものを考えてはならぬ人間集団のひたすら肉体的な動きに感動さえおぼえた。他方、こういった集団のなかで失われていく個性の行方にも、彼は深い関心をよせるようになった。

一八九九年五月、彼の属する中隊は、熱狂的な歓呼に迎えられてクライドに帰還。彼はしばらく同地に滞在したが、シカゴのリンゴ倉庫の仕事に戻る気持はなく、かといって父と弟のレイしかいないクライドにとどまるつもりもなく、まもなく、兄のカールや姉のステラのいるオハイオ州中東部の町スプリングフィールド (Springfield) にいった。カールはそこで『ウーマンズ・ホーム・コンパニオン』(*Woman's Home Companion*) 誌の挿絵画家として働き、ステラは教職についていた。カールの部屋に寄宿した彼は、カールのすすめによって、中退していたハイ・スクールの教育を修了しようと決意し、いったんクライドにかえって、夏のあいだ同地の農園で働いて学資をかせいでから、スプリングフィールドにふたたび戻り、そこのウィッテンバーグ・アカデミー (Wittenberg Academy) というハイ・スクールの第三学年に編入、翌年一九〇〇年の六月に同校を優秀な成績で卒業した。ときに彼は二三歳だった。

後年、彼はこの当時のことをほとんど無視して語りたがらず、ただ簡単に、ハイ・スクール教育ではなく大学教育をウィッテンバーグ・コレッジ (Wittenberg College) で一年ほど受けたと虚言を述べているだけである。これはもちろん、彼が自分の不規則で上級まで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo